



神道(一) (大和世界の建設)

竹葉 秀雄

古事記 はじめに(一)

「トインビーとの對話」と三島由紀夫氏の自刃②

三島由紀夫氏は彼に與へられた天賦の資即ち純粹鋭敏なる直觀力と、潜在する意識を認識する非常なる認識力、——私は彼のその力をドストエフスキーに比してゐる。ドストエフスキーも民族は神なりといひ、民族の神を有せざる民族は民族でない、愛國の至情に燃えた。——と、精確で強い推理力をもつて、美を追求し、善を追求し、眞を追求していつた。二・二六事件は當時十一歳の彼に、彼の通つてゐた學習院の近くで行はれた事件であるだけに彼に多大の影響を與へた。彼は「二・二六と私」の一篇にかう書いてゐる。

「たしかに二・二六事件の挫折によつて、何か偉大な神が死んだのだつた。當時十一歳の少年であつた私には、それはおぼろげに感じられただけだつたが、二十歳の多感な年齢に敗戦に際會したとき、私はその折の神の死の怖ろしい残酷な實感が、十一歳の少年に直觀したものと、どこかで密接につながつてゐるらしいのを感じた。それがどうつながつてゐるのか、私には久しくわからなかつたが、「十日の菊」や「憂國」を私に書かせた衝動のうちに、

第3號

月 1 回 發 行

ひの心を繼ぐ會

〒791-0510

住所:愛媛縣西條市

丹原町丹原 50-1

綱 領

- 一 私達は明德を明らかにします
- 一 私達は國家の鎮護となります
- 一 私達は大和世界を建設します

その黒い影はちらりと姿を現はし、又、定かならぬ形のままに消えて行つた。

それを二・二六事件の陰畫とすれば、少年時代から私のうちに育かれた陽畫は、蹶起將校たちの英雄的形姿であつた。その純一無垢、その果敢、その若さ、その死、すべてが神話的英雄の原型に叶つてをり、かれらの挫折と死とが、かれらを言葉の眞の意味におけるヒーローにしてゐた。」

彼は十六歳で「花ざかりの森」を書いて、一躍文壇の寵兒となり、一作ごとに反響を大にして、國中は勿論、英米に於ても彼の翻譯權は取られて、彼の一作一文は直ちに翻譯されて世界に發表され、ノーベル賞の候補者にあげられるに至つた。彼は演劇、音楽、乗馬、現代文化のあらゆるものを求め、それに徹していつた。然し彼の魂の饑を満たすものは何もなかつた。彼の文章のつづきにかう書いてゐる。

「一方、私の中の故しれぬ鬱屈は日ましにつのり、かつて若かりし日の私が、それこそ頽廢の條件と考へてゐた永い倦怠が、まるで頽廢と反對のものへ向つて、しゃにむに私を促すのを私はおどろいてゐた。(政治的立場を異にする人たちは、もちろんこれをも頽廢の一種と考へるだらうことは目に見えてゐる。) 私は劍道に凝り、竹刀の鳴動と、あの烈しいファナティックな懸聲だけに、やうやう生甲斐を見出してゐた。そして短篇小説「劍」を書いた。

私の精神状態をなんと説明したらよからうか。徐々に、目的を知らぬ憤りと悲しみは私の身内に堆積し、それがやがて二・二六事件の青年將校たちの、あ

激烈な慨きに結びつくのは時間の問題であつた。なぜなら二・二六事件は、無意識と意識の間を往復しつつ、この三十年間、たえず私と共にあつた。」多くの人々には時間とともに消えてゆく事件も、その事件が純粹に神の稜威から發した一閃であるならば、同じく純粹にして神の稜威を發し得る人に深く感動を與へ無意識の中にまで印象されやがて意識され發動されねばやまない。神の道は繼がれ、歴史は承けられる。至誠息まずである。

「私は徐々にこの悲劇の本質を理解しつつあるやうに感じた。」

と言ひ、北一輝の否定思想の颯風に捉へられた青年將校の悲劇は、方式として北一輝の方式を採用し、理念として國體を戴いたその折衷性にあるとした。彼は言ふ。

「そして國體とは？、私は當時の國體論にいくつかに目をとほしたが、曖昧模糊としてつかみがたく、北一輝の國體論否定にもそれなりの理由があるのを知りつつ、一方、「國體」そのものは、誰の心にも、明々白白炳乎として在った、といふ逆説的現象に興味を抱いた。思ふに、一億國民の心の一つ一つに國體があり、國體は一億種あるのである。軍人には軍人の國體があり、それが軍人精神と呼ばれ、二・二六事件蹶起將校の「國體」とは、この軍人精神の純粹培養されたものであつた。そして、萬世一系の天皇は同時に八百萬の神を兼ねさせたまひ、上御一人のお姿は一億人の相ことなるお姿を現し、一にして多、多にして一、……しかも誰の目にも明々白白のものだつたのである。」

彼は遂にここの境地に達した。トインビーの宇宙の真相、非人間的自然を通じての究極的實在の崇拜を、人間世界に寫したものの、日本國體の眞實に到達したのである。彼は論をすゝめて言ふ。

「この明々白白のものが、何ものかの手で曇らされ覆はれてゐると感じれば、忽ち劍を執つて、これを討ち、明澄と純潔を回復しやうと思ふのは、當り前のことである。二・二六事件にとつて、統帥大權の問題は、軍人精神を

とほしてみた國體の核心であり、これを干犯する（と考へられた）者を討つことこそ、大御心に叶ふ所以だと信じてゐた。しかもそれは大御心に叶はなかつたのみならず、干犯者に恰好な口實を與へ、身自ら「叛軍」の汚名を蒙らねばならなかつた。

中略

昭和の歴史は敗戦によつて完全に前後期に分けられたが、そこを連續して生きてきた私には、自分の連續性の根據と、論理的一貫性の根據を、どうしても探り出さなければならぬ欲求が生れてきてゐた。これは文士たると否とを問はず、生の自然な欲求と思はれる。そのとき、どうしても引つかかるのは、「象徴」として天皇を規定した新憲法よりも、天皇御自身の、この「人間宣言」であり、この疑問はおのづから、二・二六事件まで、一すぢの影を辿つて「英靈の聲」を書かずにはゐられない地點へ、私自身を追ひ込んだ。自ら「美學」と稱するのも滑稽だが、私は私のエステティックを掘り下げるにつれ、その底に天皇制の岩盤がわだかまつてゐることを知らねばならなかつた。それをいつまでも回避してゐるわけには行かぬのである。」

彼はかうして「英靈の聲」を書いた。彼はこれの形式に、歸神の法をもつてしてゐる。彼は歸神の會に臨んだことがあるのかどうか。それは知るところではないが、いづれにしても彼は天行居の友清歡眞氏の「靈學筌蹄」の中の鎮魂歸神をよく讀み、この歸神の場面を見事に表現してゐる。彼は神道の靈魂、佛教の轉生を研究し、信じてゐる。英靈は川崎といふ青年に憑つて歌ふ。はじめは二・二六の青年將校の聲である。

「かけまくもあやにかしこき

すめらみことに伏して奏さく

今、四海必ずしも波穩やかならねど

日の本のやまとの國は
 鼓腹撃壤の世をば現じ
 御仁徳の下、平和は世にみちみち
 人ら泰平のゆるき微笑みに顔見交はし
 利害は錯綜し、敵味方も相結び、
 外國の金錢は人らを走らせ
 もはや戦ひを欲せざる者は鄙劣をも愛し、
 邪まなる戦のみ陰にはびこり
 夫婦朋友も信ずる能はず
 いつはりの人間主義をたつきの糧となし
 偽善の團欒は世をおほひ
 力は貶せられ、肉は蔑され、
 若人らは咽喉元をしめつけられつつ
 怠惰と麻薬と鬪争に
 かつまた臨みなき小志の道へ
 羊のごとく歩みを揃へ、
 快樂もその實を失ひ、信義もその力を喪ひ、
 魂は悉く腐蝕せられ
 年老いたる者は卑しき自己肯定と保全をば、
 道徳の名の下に天下にひろげ、
 眞實はおほひかくされ、眞情は病み、
 道ゆく人の足は希望に踊ることかつてなく
 すべてに癡呆の笑ひは浸潤し
 魂の死は行人の額に透かし見られ、
 よろこびも悲しみも須臾にして去り、
 清純は商はれ、淫蕩は衰へ、

ただ金よ金よと思ひめぐらせば
 人の値打は金よりも卑しくなりゆき、
 世に背く者は背く者の流派に、
 生かしこげの安住の宿りを營み、
 世に時めく者は自己満足の
 いぎたなき鼻孔をふくらませ、
 ふたたび衰へたる美は天下を風靡し
 陋劣なる眞實のみ眞實と呼ばれ、
 車は蕃殖し、愚かしき速度は魂を寸斷し、
 大ビルは建てども大儀は崩潰し
 その窓々は欲求不満の螢光燈に輝き渡り、
 朝な朝な昇る日はスモッグに曇り
 感情は鈍磨し、鋭角は磨滅し、
 烈しきもの、雄々しき魂は地を拂ふ。
 血潮はことごとく汚れて平和に澱み
 ほとばしる清き血潮は涸れ果てぬ。
 天翔けるものは翼を折られ
 不朽の榮光をば白蟻どもは嘲笑ふ
 かかる日に、
 などてすめるぎは人間となりたまひし」
 英靈の怒號と慟哭は嵐となつて戸外に狂ふ中に、審神者たる翁の石笛は
 神々しく響く。神風特攻隊の靈も來り加つて更に英靈達の聲は強大となる。
 「陛下がただ人間と仰せ出されしとき
 神のために死したる靈は名を剝脱され
 祭らるべき社もなく

今もなほうつろなる胸より血潮を流し
神界にありながら安らひはあらず」

「日本の破れたるはよし

農地の改革せられたるはよし

社會主義的改革も行はるるもよし

わが祖國は敗れたれば

敗れたる負目を悉く肩に荷ふはよし

わが國民はよく負荷に耐へ

試煉をくぐりてなほ力あり。

屈辱を嘗めつくし、

抗すべからざる要求を潔く受け容れしはよし、

されど、ただ一つ、ただ一つ、

いかなる強制、いかなる彈壓、

いかなる死の脅迫ありとも、

陛下は人間なりと仰せらるべからざりし。

世のそしり、人の侮りを受けつつ、

ただ陛下御一人、神として御身を保たせ玉ひ、

それを架空、それをいつはりとはゆめ宣はず、

(たとへみ心の裡深く、さなりと思すとも)

祭服に玉體を包み、夜晝おぼろげに

宮中賢所のなほ奥深く

皇祖皇宗のおんみたまの前にぬかづき、

神のおんために死したる者らの靈を祭りて

ただ齋き、ただ祈りてましまさば、

何ほどか尊かりしならん。

などてすめるぎは人間となりたまひし。

などてすめるぎは人間となりたまひし。

などてすめるぎは人間となりたまひし。

.....」

天地も裂けんばかりの英靈たちの慟哭は猛り狂ふ嵐となつて、「人間宣言」

を恨み悲しむのである。「英靈の聲」は實に凄まじい慟哭の詩篇である。こ

れは三島由紀夫氏の慟哭であり、悲しみ叫ぶ須佐之男命の荒魂である。

彼はこの慟哭をただ文士の詩篇としてすませたのではない。猛り狂ふ全

學連の中になほ純粹さと熱情をみとめ、出来れば彼等を天皇に歸一せしめ

んとした。當時の大學の教授達がつるし上げにあひ、皆彼等から回避しや

うとしてゐた時に、三島氏は自ら進んで、その理論的にも行動的にも最も

強烈な東大の全共闘會議に對決を申し込み、一人よく七百名を相手に討論

した。(一九六九年五月十三日、東京大學教養學部九〇〇番教室) 入れ替り

立ち替りあらゆる角度から攻めかゝる激論と、周圍を取り巻いて笑ひや拍

手で壓倒しやうとする、二時間半孤立の中にあつて、一步も譲らず、かへ

つて相手を氣魄(三島氏は死の覺悟をしてゐたとも聞く)と理論で壓倒し、

彼等が最も無視せんとする「天皇」論を投じたのである。

「……つまり天皇を天皇と諸君が一言言つてくれれば、私は喜んで諸君と

手をつなぐのに、」

また言つてゐる

「……いま天皇といふことを口にしただけで共闘するといつた。これは言靈

といふものの働きだと思ふのですね。それでなければ、天皇といふことを

口にするのも穢らはしかつたやうな人が、この二時間半のシンポジウム

の間に、あれだけ大勢の人間がたとへ悪口にしる、天皇なんて口から言つ

たはずがない。言葉は言葉を呼んで、翼をもつてこの部屋の中を飛び廻つ

たんです。この言靈がどつかにどんなふうに残るか知りませんが、私はそ

の言葉を、言靈をとにかくここに残して私は去つていきます。そして私は諸君の熱情は信じます。これだけは信じます。ほかのものは一切信じないとしても、これだけは信じるといふことはわかかつてゐただきたい。」

と、堂々と引き上げたのである。三島氏に投げつけやうと用意してゐた生卵はつひに彼等のポケットにしまはれたまゝで。

悲しい戀闕の心である。ここに宇宙の最も尊いひびきがあり、地上の眞善美の極致がある。三島氏は彼らの口から天皇と言はしめるだけでもよい。その言靈を信じ、その言靈を残して去ると言ひ、なほ彼等の熱情だけは信じると言ふ。ここにゐたるも彼等と斷絶せず、未來に託しやうとしてゐるのである。(三島氏が自刃した今日どのやうな影響を與へてゐるか。)

彼はなほ諦めない。大學生の優秀なる者を選んで「楯の會」を作つた。「醜の御楯」である。そして訓練して時を待つた。然し、つひに時を逸したと彼は斷じて、あの十一月二十五日の自刃となつたのである。このことの事實については今更私が書くまでもない。あらゆる報道・言論雑誌が書きつづけてゐる。私が、「神道」のはじめに、三島氏のことを長すぎるほど書いたのは何故か。彼が十一歳の時、純眞なる魂に印せられた二・二六の青年將校の純一無雜玉のやうに美しい精神と、二十歳の燃ゆるやうな情熱の心に與へられた神のやうな神風特攻隊の姿が、戦後の虚脱と放縱と無神と物慾と、淫蕩と鬪争のヘドロの世にありながら、彼においては、その潜在意識の中に印せられた日本の精神と傳統が漸次認識されて、遂に日本本來の相、天皇にまで格つた。ここに純一無雜、眞・善・美の極致がある。ここに神の座があり、神の顯現がある。一君即萬民、一神即八百萬神の相がある、と全身全靈をもつて徹見した。この思想の原點において核の爆發を行ふたのである。場所は自衛隊の總監室において、自衛隊にのみ先づ眞の日本、眞の日本人を見んとしてゐたその自衛隊において。日本を骨抜きにした憲法に體をぶつつけて自刃したのである。天皇陛下萬歳を三唱した後、七生報國を誓ひ、日本武夫の古式に法

つて見事割腹自刃、更に介錯をもつて、日本の眞髓を示したのである。

日本の道衰へ正に極まらんとした時、一閃の白光神氣を發して、日本の神國たるを示したのである。日本のみでなく全世界に衝撃を與へた。原爆をうけた日本は、此度は日本の中樞において自ら核爆發した。全世界はこの震動によつて變革を生じるであらう。睡れる日本はこれから目覺め、人類は彼の行動と思想を探ねて、日本の眞實を識り、宇宙の實相を認識するにいたるであらう。

時も時、「トインビーとの對話」が、日本と人類に呼びかけてゐるのである。呼びかけと應、日本神道における伊邪那岐神と伊邪那美神の「いぎ」の呼びかけと「いぎ」の應。三島由紀夫が伊邪那岐なれば、トインビーは伊邪那美である。天津神は、ヘドロなす漂へる世界に神集ひ神議りして、この二柱に天之瓊矛を與へ修理固成を命ぜられたのである。地球の東西、表裏において、陰陽相應じ、歸入と演繹、求心と遠心、理は全く協うてゐる。

この理事を、昨年の「〇」零の歳は孕んだと私は觀る。そして今年の「一」の歳を迎へたのである。

このことは、當然、「古事記」の世界に向ふのである。私もつひに時來つて、私の生涯をかけた「神道」、そして「古事記」を述べる時にいたつた。

(以下次號)

農士道 外篇 緒論 職業の位育と參贊

菅原 兵治

如何なる職業にも、それが正しき職業たる限り、「位育」と「參贊」との二つの使命があるものである。

「位育」とは、詳しくいへば「天地位し、萬物育す。——中庸、首章——」の意で、其の職業生活の内容がよく整ふて、——例へば主人と家族、勞働力と勞働對象たる土地や器具等の關係がよく調和して（天地位し）、其の職業の經營がよく榮えて行き、之に従ふ人がそれに依つて生活して行く（萬物育す）といふことで、職業の内面的考察であり、其の個人的使命である。之に對して「參贊」とは、吾々が或る一定の職業に従つて位育しつつ、其の職業を通じて、國家社會——更に大きくいへば、天地生々化育の造化のはたらきに參じ、其のはたらきの一部分を擔當して之を贊けて行くといふことで、何れかといへば、職業の外面的考察であり、其の社會的使命である。だから最も分り易く要言すれば、位育は其の職業に従事して衣食して行くことであり、參贊は社會の爲に盡して行くことであると謂ひ得よう。

物に表裏あるが如く、すべての職業に此の「位育」と「參贊」との両面が存するのである。然し此の両面は、決して排他的關係のものではなく、相關相待の一體的關係のものである。それは恰度、吾々の身體に於ける臟腑と全身との關係のやうなもので、胃が極めて健全で、よく食物を攝取吸収するといふ、胃としての位育的職分を完全に全うしてある時は、自づから全身の健康に貢獻して居ることになり、又、胃が全身の健康に對する己が參贊的使命をよく自覺して、其の職分機能を十全に遂行せんと努むれば、自づから其の中に適當なる食物を供せられるといふ如き關係のものであつて、兩者は飽くまでも相關補全の關係たることを忘れてはならぬ。

この位育と參贊との自覺を最もよく表はした語に「自分」といふ言葉がある。私共は不斷之を何の氣無しに用ゐてゐるが、深く味つて見れば、「自」は各自自身の生活たる位育的方面の自覺を意味し、之に對して「分」は國家社會に對する其の人の擔當すべき分、即ち職分、身分等の參贊的方面の自覺を意味するものである。「我」を呼ぶに「自分」の語を以てした日本人の哲學は誠に深い。私共は須らく「自」と「分」との使命を一丸として「自分」の生活に徹せねばならぬ。

然るに世人はともすれば、職業の位育的意義——それによつて衣食して行くといふ方面のみを考へて狂奔し、其の參贊的意義を忘れ勝ちである。其の結果は却つて衣食をすら満たし得ないといふことになるのである。それは何故か。眞摯に百里の地に志す者は、五十里の地は必ず通過する。而かも其の緊張から易々として通り過ぎる如く、眞に此の職業職分を通じて、國家人類に對して參贊の使命を果さずには止まずと覺悟し、努力する時、其の衣食の事ぐらゐは「天は自から助くる者を助く」るもので、必ず與へらるべきものであるからである。

ここに同じ工場に勤めてゐる二人の技師がある。一人は其の専門の職分を通じて常に工場全體の繁榮向上の爲に貢獻し、延いては其の仕事を通じて何等か國家社會の爲に幸福を齎らさうと、時に衣食の事などを忘れて參贊の使命に精勵してゐる。之に對して他の一人は、俺の勤めるのは月給を貰ふ爲なのだ。月給が少しでも上つて、晩酌の一杯も追加出来れば澤山だ、何を苦しんで進んでそんな苦勞をせぬでもよいではないかといふ有様だ。之を見た上役が、昇給せしめる時に何れを先にするか、又、免職せしむる時に何れを先にするか。參贊の努力が位育に及ぼす功德はかくの如きものである。

勿論方便的に參贊的言行を偽飾するのでは論外であるが、其の職業に對して、眞箇に參贊の自覺と熱意とを有するの士ならば、「道中衣食有り」で、位育の事は自づと齎されるであらう。

少しく冗述の嫌もあるが、職業に於ける參贊と位育との關係はかくの如きものである。然らば「農」といふ職業の使命は如何。勿論一身一家の生計の爲といふ位育的使命を全うせねばならぬは當然のことであるが、從來農業の使命に對する指導が餘りにも此の方面のみに偏して、國家人類に對する參贊的方面に對してのそれは、輕視し勝ちな嫌無しとしなかつたではあるまいか。私は前述の如き見地より、此の際大いに「農」の參贊的使命を顯彰し、其の大使命の自覺の下に、雄渾高邁なる志氣と熱意とを以て、其の生活に精進するの秋であると信ずる。

然らば「農」の參贊的使命は何か。私は概約して左の三點を挙げたいと思ふ。

- 一、 物的資源の生産
- 二、 人的資源の育成
- 三、 傳統文化の保持培養

第一の物的資源の生産に就いては、平常時に於ても勿論然うであるが、今次の如き非常時に於て特に其の然るを見得るのである。歐州大戰に於ては大概の國家は極端なる食糧制限を行ひ、獨逸の如き各部戰線に於て何れも敵地に進出して、戰に於ては勝利を得つつも、城下の盟の屈辱を受けねばならなかつた最大原因は、食料の缺乏にあつたと謂はれるではないか。今次の日支事變に於て、我が國の食料の潤澤なことは、各國の何れも驚歎する處であるといふが、恐らく此の戰爭が何年續かうと軍民共に食料に對しては不足を來さしめぬ日本農村農民の參贊的能力は實に大なりといふべく、この事は常時非常時の別なく永久に持續することは、農民の一大使命

である。

第二に、農村には此の物的資源の供給の外に更に人的資源供給の大使命がある。よく「農村は人口の貯水池なり」といわれるが、農村は單に量に於て然るのみならず、更に質の方面より之を見れば、質實なる農道的氣象の裏に育成せられたる剛健清新なる人材——然り、國家國民の生命に潑刺たる活力 Vitality を注入して、其の命を常に維れ新ならしむるに足る清新なる人材の供給が是れである。此の點に就いては本書を通じて力説する處であるが、今次の如き内外非常時局に於ては此の事が特に強く肯かれ、今後國內の維新、東亞の建設に直面するに於ては、更に痛感することであると思ふ。

而して第三の其の國の傳統文化の保持培養といふ點に就いては、今後の日本農村の使命より見て特に探究すべき點でもあるので一言したいと思ふ。一體何れの國に於ても、都市は發達すればするほど國際化せんとする傾向あるに對して、農村は其國の傳統文化を永く保持培養する機能を有つものである。従つて明治大正時代の如く、日本が歐米文化の摸倣移入時代ならば、文化的に見て、農村の存在といふことは大した意義もなかつたであらうが、今日の如く日本が東洋の指導的地位を確保し、愈々其の事に當らねばならぬ時に至つては、日本的傳統の保持者としての日本農村の使命は甚だ重いことを痛感せねばならぬ。其の精神に於て、風習に於て、制度に於て、日本農村の有する日本的資料は、今後の東洋鄉村建設指導に當つて、甚だ尊重せらるべきものである。かくて今後の日本農村及農家は、其の生活の精神に於て、其の經營の實際に當つて、東洋の農村生活は、當に斯くあるべきものなりとの範を示し得るだけの自覺と矜持と、而して努力とを有たねばならぬ。——從來保持し來れる傳統文化を培養して、更に創造的積極的なるこの新生命を有らしめねばならぬ。それを若し傳統國粹の保持培養體としての農村農家までが、其の本來の精神を以てしては生活も經營

も出来ぬとあつては、東洋の指導者たる日本の面目何處に在りやを憂ふる時、日本農村の日本國家及東洋に對する參贊的使命の如何に重きかを覺知せずには居られぬであらう。

以上、國民生活資源生産の使命を考へ、人材育成の使命を考へ、而して新東洋鄉村建設に對する指導的使命を考ふる時、日本農民は、畜單たんだんに一身一家の衣食に満足する程度位の理想では儼あまたり得るものではない。畏くも繼體けいたい天皇勸農の詔に

朕聞く、士、當年耕さざる者あれば、即ち天下其の饑うえを受くることあり。

女、當年績つむがざる者あれば、天下其の寒を受くることあり。

と仰せられてあるが、一夫たる此の自分の耕し方の如何、一婦たる此の自分の績つむぎ方の如何が、直ちに天下に影響するものであるとの自覺と熱意とを以て、心魂を籠こめて己が仕事に精進したならば、一身一家の生計は其間に自づから將來せられるべきである。眞に參贊までの熱意あらば、位育の生活は必ず其間に存するものと信ずる。而して又之を逆に言へば、少くも己が職業に於て位育（深い意味に於ての）も出来ぬやうでは、天下國家への參贊の功を全うし得られるものではないことが、恰あたかも胃が胃の使命たる消化吸収の作用もでき得ないで、全身の健康に寄與きよこ、貢獻きこうするなど壯語そうごしても、其の實決して參贊の功を全うし得ないのと一般である。

以上、農といふ職業に就いて、其の位育、參贊の兩使命を考察したが、本書に於ては、外篇がいへんに於て主として農の輪廓りんかく的なる參贊的方面を、内篇に於て主として其の内容的なる位育的方面——單に衣食のみに限らず、もつと深い全人生の性命的なそれの——自覺を述べんとするつもりである。

心と形

三浦 夏南

「姿ハ似セガタク意ハ似セ易シ」とは本居宣長翁の言葉に對する見解であるが、その逆説的且つ皮肉な翁の名言には深遠な眞理が内包されてゐる。翁の言ふ姿とは歌の姿、言葉の使ひ様のことであり、意とはその意味内容を指す。常識的な考へでは、言葉の持つ深い意味を悟ることは難く、その精神を體得たいとくすることは困難であり、逆に表面上の形、言ひ方を口眞似することは容易であるといったことになる。然しながら眞實は言葉の形そのままが心であり、心を離れた形もなければ、形を離れた心もない。物心一如ぶつしんいちにょ、一字一音たりとも動かすことのできぬ言葉の姿こそその言葉の意味そのものである。

儒教全盛の江戸時代にあつては、四書五經を中心とした漢文が學問の中心であり、表現形式も漢文、或いは漢文の書き下し調が主流であつた。崎門學、水戸學等我が國の本質を研究し、國體こくたいを明徴にすることを目的とした學問も、漢文の表現形式を通して國體を解説してゐた。つまり知らず知らずの裡うちにシナの言葉即精神を通して國體を見てゐたのである。この極めて微妙に見え難き問題に着目し、漢意即漢言葉であることを見抜き、シナの表現形式を擲なげつて皇國の古の言葉に直入することを説いたのが本居宣長翁をはじめとした國學の先哲である。

實はこの心と形の問題は言葉だけに限られたことではない。江戸時代より少し時を進めて明治時代の時分を鑒かんみるに、我が國が學國一致きよこくいちして外夷がいに當たるに必要としたものは軍艦であり、兵器である。どれほど大和魂を強固きやうこたらしむるとも日本刀に弓を引つ提げて、大砲を積載した蒸氣船を攘夷するとは叶はない。さらに國を急速に富ませるには、西洋と同じく生産の機械化が不可欠となり、精巧な西洋の機械を取り入れることとなる。始めは尊攘の大義を開き展ひらめんがための手段であつた西洋の機械、技術が何時の間にか日本人の心を西洋人の心へと化するやうになり、大和心から西洋心へと變質へんしつし

た國民は益々西洋の物質を輸入して行くこととなる。衣服が變はり、住居が變はり、食事が西洋化して行く。衣食住は人間生活の根本であり、生活の西洋化は日本人の肚へと西洋を注入することとなる。前述の形と心の問題に於て宣長翁が指摘されたやうに形の西洋化はそのまま心の西洋化へとつながるのである。このやうに日本は外來の精神にかぶれるといった内面上の變質よりも、外來の物質の必要性、或いは利便性から來る形の變化によつてより深く外來精神に侵されるといふ特徴を持つてゐる。この事實は儒教、佛敎の傳來も外來の物質、技術とともにたらされ、國內に滲透して行つた歴史からも頷かれると思ふ。

翻つて今日の日本を見るに、日本精神、大和魂の復興が喧しく騒がれるが、日本精神衰頹の根本原因は生活の傳統的な形の變質にあるのである。この形から切り離して心を語るところに無理があり、語り得たとしてもそれは抽象的なイデオロギーの範圍を抜け出さない。生活がその髓まで西洋化してゐながら大和魂を持つことは、漢文を通して國體を語る以上に矛盾である。戦前戦後を通して日本は、體は個人主義、自由主義、資本主義を體現するが如く西洋化しながら、頭と口では日本精神を叫び續けて來た。この矛盾を超克し、身も心も國體へと回歸しなければ、到底物質文明に喘ぐ日本を、延いては世界を救出することはできないのである。

周圍を見渡せば、生活の隅々にまで西洋近代の産物が行き渡つてゐるではないか。朝パンをかじりながら、洋服に身を包み、西洋流の知識偏重のアカデミックな大學とやらへとスニーカーで登校し、眠たい講義をやり過ごしつつ晝食はカフェにてフオークでパスタをすすする。日も暮れば商店街の八百屋、魚屋を田舎より放逐したスーパーマーケットでのアルバイト。夜はバーで一杯飲んで、ベッドに就寢である。これは大學生の一日を簡潔にまとめたものであるが、小學生からサラリーマンまで大同小異の西洋的生活である

と思ふ。

一族狭いながらも古風な家に身を寄せながら起居し、野に耕し祭りを行ひ、神々と祖先に崇敬の誠を致し、一族の團結を確固たるものとする。學問にて道を明らかにし、詩を吟じて志を發し、一旦緩急あればと古流武術の修練に精を出す。仕官しては先祖代々の君に仕へ、繼承してきた仕事に専念する。吉田松陰先生をはじめ、江戸時代の士はこの生活から成長して來られたのである。その中には陋習もあり、儒敎倫理に歪められた部分も多分にあつたであらうが、現代に比較すればその大半が日本的であり、少なくとも東洋的生活であつたのである。

我々は今こそ民族の生活の原點に回歸し、生活の形より改めて行かねばならない。なぜなら形こそが心であり、二者は相即不離のものであるからだ。そしてこの回歸を國家的運動へと進展させて行くためには政治、經濟の維新を必要とすることは言ふまでもないが、明明徳、新民といひ、修己治人といふやうに先づ己に基づかぬものには實がない。範を垂れることなくして教化とはをこがましい限りである。まづは自ら實行し、自らの一族を修理固成すること。すべてはここから始まらなければならない。これは理念の表明ではなく、我々の現實的目標の宣言である。我が一族は農へと回歸し、生活の維新へと遅遅たる歩みではあるが日々邁進しつつある。その維新は農を基底とした一族の確立より始まつて生活の全面に渡るものでなければならない。その具體的な事柄に關しても號を追つて書いて行きたいと思ふ。

★活動報告

- ・五月二十二日(火)、勉強會『土居清良』を開催。
- ・六月十二日(火)、勉強會『古事記』を開催。

★今後の豫定

- ・七月二十四日(火) 十九時～二十一時 『農士道』
松山市男女共同参画推進センター☆コムズ三階會議室112
(住所：愛媛縣松山市三番町六丁目四一〇)

- ・七月三十一日(火) 十九時～二十一時 『土居清良』
松山市男女共同参画推進センター☆コムズ三階會議室112
(住所：愛媛縣松山市三番町六丁目四一〇)

★一燈照隅 萬燈照國

ひの心を繼ぐ會は竹葉秀雄・近藤美佐子兩先生の精神を繼承し、發展させることを目的として生まれた會です。一人の「ひ」の精神が周囲の人々の心に「ひ」を燈し、やがてそれが國を照らす「ひ」になることを願ひ、活動を行つてをります。皆様には何卒ご理解とご支援を賜りますやう、宜しくお願ひ申し上げます。

年會費

- ・一般會員 三千圓
- ・贊助會員 一萬圓
- ・特別贊助會員 三萬圓
- ・支援會員 一萬圓

